

G—1 わが国における一般国民の食生活に関する 教養の展開過程(第4報)

—栄養に関する教養を中心として—

和洋女大文家政 石川松太郎
清水女高 ○市毛 弘子

1. 本研究は、近代社会において発刊された4種の生活総合事典(明治39年版・昭和2年版・昭和9年版・昭和37年版)に採録された食生活にかかわる事項(約7000項目)を調査し、これをもとに、明治初年以降、今日にいたるまで、一般国民、とりわけ主婦が、この面で身につけてきた、または身につけるように期待されてきた教養が、量的ないし、質的に、どのような変動過程をたどったかについて分析する。そして、このことにより、将来の家庭生活、家庭教育のあり方について、示唆をうることをもって目的とする。

2,3. すでに第3報までに(本学会第19—21回総会で発表)、上記7000項目中、食品・嗜好品・料理品・調理技法・調理機器などの調査結果について発表した。今回は、更に、食品関係科学、とりわけ栄養に関する事項を検討する。この分野は、各事典により、すなわち年代の推移に伴って、取り扱い方にも、解説内容にも、顕著な変動が生じているので、この面に重点をかけて調査を進めた。そして、こうした変動を支える歴史的要因を分析してみるために、一方では、食品化学、栄養化学、生化学などの一般的な発達過程と対照させ、他方では、主として女子中等教育機関における食物教育、特に栄養指導の変動過程との対応を試みた。その結果、家庭教育ないし家庭科教育史の上で、重要ではないかと思われるいくつかの結果が得られたので、発表を希望することとした。